

В.Г.Селитренникова,И.Г.Ягушкин.

АПОЛЛОН ГРИГОРЬЕВ И МИТЯ КАРАМАЗОВ.

…『カラマーゾフの兄弟』における3人の登場人物の中で、2人は個人主義的な道歩く。懷疑の道を行くのは知性の個人主義者であるイワンであり、情欲の道を行くのは、心の個人主義者であるミーチャである。心の個人主義は、我々の見解では、ドストエフスキーにとって、モチャーロフ《1800-48；俳優、ロシア演劇におけるロマンチズムの代表者》¹的グリゴリエフの本質的なロマンチズムである。グリゴリエフは、勿論、完全な意味でドミートリー・カラマーゾフのプロトタイプというわけではない。しかし、少なくとも私たちは最終的に、性格的なグリゴリエフの特徴を多く見るのであり、彼らの結びつきは、十分に密である。

ミーチャ・カラマーゾフは、詩の人である。有名な二つの深淵が彼を引き寄せ、解明しながら、一瞬が彼の人生を支配している。歓喜と転落、シラーと淫蕩、気高い精神の高揚と低劣な行為とが徐々に、さもなくば同時に彼の人生の中で進むのである。これらの十分に明らかな点はグリゴリエフに近い精神的な状況を指し示している。まさしく、思想的なものと大地的なものとの衝突と、熱烈な渴きを伴った高度な存在への要求はグリゴリエフの運命とミーチャの運命の中で生きられ、見る事が出来るのである。このような説明は、最初に生まれたものであって、根拠を奪われたものではない。女性と愛に関する関係について取り上げてみよう。これら二つにおける関係はちょうど反対立するものが破局的に出会う点のようなものである。ミーチャにとっては、ご存知のようにここでちょうどマドンナの理想とソドムの理想（同様の二つの深淵）が境を接し、それらを分割し、ミーチャの手に負えないものを指し示すのである。グリゴリエフにも自分のマドンナの理想があった。イタリアからの手紙の中で彼は彼は何度も何度もМулильоの絵画に出てくるような理想的な女性像について触れている。そしてそれと同時に彼は、「女性に関する憂鬱」を消し去る事が出来なかった。ルーブル美術館で彼はミロのヴィーナスに、自分に「放蕩の売買（売春婦）ではなく、女性一巫女」を送ってもらうように祈っている。逆上のカラマーゾフの感情が、彼の手紙の中で、ミーチャのグルーシェニカ女王への讃歌のようにほとんど明確とすら言えるように聞こえるのである。「正直に言って、私は最後の4年間で、あらゆることをした。あらゆる下劣な行いをしたし、それはまるで一人のピューリタンのような高潔な女のためにすべての女に復讐するようなものだった。私は時々彼女を、最低なほど、自虐的なまでに愛するのだ。彼女は私を高揚させる唯一のものでありながらも、しかし…。」

しかし、それでもやはり同様の、ミーチャととりわけグリゴリエフの悲劇の説明は、ドストエフスキーよりも検事イッポリートの視点とより一致する。検事の知恵も叡智も奪う事は出来ないのだが、彼と著者との関係は皮肉なままである。検事が裁判でミーチャの悲劇や、彼の深淵やロシアの三頭立て馬車は、単に起った要素の説明のままである。検事の言葉はドストエフスキーによって皮肉に描かれている。「ヨーロッパではハムレットだが、こちらではカラマーゾフなのだ。」作家にとってはミーチャも同様にアポロン・グリゴリエフのように、太くて堅いハムレットの生まれなのである。

ミーチャの頑丈なロマンチズムの根っこは、「生の狂乱した渴きの中」にだけ横たわっているということ

¹ 研究社 露和辞典より

ではない。そのことについて彼自身がはっきりと言っている。「まさしく、恐らく知られざる思想が私の中で荒れ狂っている事によって私は陶醉し、戦い、狂乱しているのである。」ドミートリー・フォードロヴィチのある思想は、本質的には悪化して推移するグリゴリエフの時間であり、その時その時単に彼は、自然の衝動に従うのみなのである。もしよく観察してみるならば、ハムレット的な分裂状態や、二つの存在の非共存性が自己のカラマーゾフ的な調子に合わせて、ミーチャの心を打っているのである。まさしく彼は、「低劣さの深淵に横たわっていながらも、しかしいつまでも存在としても、内面も、深さも高潔な存在として横たわった人間なのである…高潔さが渴きを覚えるということは、すなわち気高さの受難者であり、ディオゲノスの灯りを伴った気高さの探索者であったということであり、しかしながら忌まわしい行為ばかり行なっていたのである。ここで私たちが目にしていように、無意識の要素への従属は内面的な完全性をもたらすということである。我々はこれはグリゴリエフの自己評価の中で見てきたのは、彼自身が人生の姿を唯一可能なものとして選択してきたにも関わらず彼自身の過ぎ去った時間によって彼が自身を正当化しなければならなかったということである。彼は、野蛮なおさえようのない力が発散し、彼がイタリアにいた年の時にそのせいで彼に耐えず大きな権力を打ち付けていることを自覚し、必要なようには生きてはいないということをより鋭く感じていた。彼の手紙からの例をあげてみよう。「自堕落で醜悪な生活の運命は横になったきりで動けないが、しかしそこから私はあなたにすべてのよい点からもよくない点からもご存知である野蛮な紳士でもあるに関わらずそこから迸り出るのである。私がパリにいる間は、その事についてもうこれ以上尋ねないで下さい。毒のある憂鬱、理性のない—忌まわしい熱中、厳格が見えるほどの酔っ払い—それが私なのです。」

ロマンチックに小市民の道徳的な規範を拒否し、自堕落と醜悪の舞に身をゆだねながらも、彼自身は「道徳的な観点からではなくて、美学的な観点から」人生を眺めることに慣れることは出来ず、「自堕落は恐らくは血の涙によって悼まれ、地獄の苦しみにによって代価を支払われるだろう」と自覚していた。分裂は再び彼を待ち受け、どうやら出口を探していたのであった。彼の心配がないように生活するための方法として見つけられた出口は信仰や、理念と一致しないものであったようであるし、この不一致が、信仰と生活において重大な経験だった様である。弱まった信仰は不可避免的に生活や自己自身に差し向けられた鬱積した否定に席をあたえるものであった。彼はプロトボーボヴァに対して、彼女の友情が彼にとっては分析によって切り刻み、ドン＝キホーテ性を嘲笑し、シニシズムと醜悪によって驚かせる権利を意味するのである。生活における信仰とシニシズム、醜悪と良心の苦しみとの（ミーチャにとっては低劣さと高邁さとの）結合は、その憎々しい分裂でもあったのである。しかしながら、敗北に耐えて、グリゴリエフは信仰を保護しながらも完全な理想に降伏しようとはしなかった。彼の生活を満杯にしていた戦いは、自己の最終的な恐ろしい局面に突入していた。彼はやはり、等しい誠実さと最高度の両方にふくじゅうしながら信仰と絶望を結合したのだった。「しかしながらもしあなたが地獄の苦しみの重さをすべて知っているとしたら、あなたが来るときには、ありとあらゆる汚らわしさと狂乱の宴の後のいちばん最初になるでしょう。そうです！カインの孤独の憂愁を私は経験したのです。憂愁をかき消すために私はコニャックを飲み、朝まで飲んだのです。一人で飲みましたが、酔っ払う事は出来ませんでした。恐ろしい夜です！深く、炎のように神を信じながら…私は一口に出すのが怖いのですが—神をののしりましたが、しかし神はこれらのうめき声とののしりが信仰だと知っていたのです。」

彼の人生の二つの深淵はよりはっきりと現れ出ていた。彼はロシアの魂の二重性について書き、それによって彼に起った事を正当化しようと試みたのである。（「イリヤ　ムーロメツの聖性と、アリョーシャ・パープロヴィチの道楽、ある歌の中にある家庭的原則への従順さや、彼の他の人との関係における暴飲」である。）しかしながら彼の分裂性は鋭い批判的な意識に関して堪えがたいものであったようであり、彼のイタリアでの滞在の終わりから彼の魂の中では最後の戦いが起っていた。その戦いは本当のところ生と死との戦いだった。彼はパゴージンに書いている。「私を、例えるなら、いかなる人間的な力も、救い、直すことが出来ないだろう。私には経験がないのだ…私は永遠の自然的な突進に陥ってしまっているのだ…私からも、私たちからも、おおむね何も出てこないし、何も出ようがないのである。それはそうと今はそんな時ではない。」

どうやら、文字通り深淵を深めさせ、深淵を正当化させながら、意識を静めさせるために、熱狂は全てを高め、その熱狂と共に彼は自分の魂の正反対の呼びかけに従ったのだった。彼はやはり人生を信じつづけたが、しかし自分を渦巻状の原理にとらわれていると感じ、信仰のために自分を感情と共に最後までその原理に服従させた。その原理とはアレクサンドル・ブロークが破滅への愛と後に呼んだものだった。彼の最後の放浪の恐ろしい記念碑となったのは、まだ十分には価値づけられてはいないが、誠実さに関してはロシアの詩の中でも唯一のものである「ボルガ川の上流へ」という詩であり、それは「ウォッカはないか？」といううめきで幕を閉じるのである。ボルガ川の上流へと彼はペテルブルグに戻り、そこで40歳の男に待ち受けていたものは、債務監獄と塙の下でのほとんど急死とも言えるものだった。

渦巻きのような感情のリズムは、同様にアポロン・グリゴリーエフとドミートリー・カラマーゾフの人生に存在している。ドストエフスキーの長篇では、このリズムがほとんど一定の役割を演じている。ミーチャの裁判での、休止と急展開にも関わらず、文字通り進路を変えながら、感情の速さはたえず高まり、ミーチャを臨界点へと連れ去るのである。モークロエへの絶望的な出発の場面において高度な表現がこのリズムを目にしており、その時女性への情熱が彼の心の中では存在に対する否認や恥の情熱と戦っており、理性を取り囲んで描かれているのは唯一の出口である自殺だけである。「それでもやはり全ての受け入れの決意にも関わらず、彼の心の中にぼんやりとあったものは、苦痛なほどにぼんやりとあったものは安堵の決意を与えなかった…道中一瞬、彼は突然自分の装填されたピストルを手にし、夜明けを待つまでもなく、全てを終わらせようとした。しかしその瞬間は火花のように飛び去った。そしてトロイカは空を切って飛んでいき、目的地に近づけば近づくほど彼女への思い、彼女への思いが彼の心をつかむのだった…」

ミーチャのトロイカの突進的な飛行の中で、それぞれの鈴の音が聞こえてきて、歓喜と奇妙な安らぎを繰り返して、そのような心がこれら全ての動作と知覚の調子はずれのところにあるのである。同様の響きを私たちはグリゴリーエフの人生と詩の中で見ることができるのである。彼にとって価値のある瞬間というものは、「激しくハンガリー舞曲が鳴り響き、その出口のない苦しみの詩が流星のような、居酒屋のような」時なのである。同様に、思い出の際に彼に湧き出てくるものがある。「ああ！センノキが悲しい時に悲しい桜の下で、貴族はジブシーを愛し、ジブシーの女を愛し、女は嫁に行ってしまった。」彼自身のハンガリー舞曲は、過ぎ去ってしまった人生の響きによって満たされている。「あなた、縄で苦しみを持っていてくれ。」指摘しておきたいのは、変化されているが、しかし同様の、グリゴリーエフ的カラマーゾフ的テーマがブロークにも聞きうけられるのである。「ほら、私の幸せは一銀色のトロイカに乗って消えてしまっ

ている…そして金の馬具だけが夜中ずっと見えている…夜中ずっと聞こえている…あなたは魂だ…鈍い魂だ…酔いに酔っている…酔いに酔っている…」

この中に、最終的なものではないグリゴリエフのロマンチズムの特徴的な点の一つがあり、30年代のロマンチズムから分けているのである。この中には天上との誇らしい敵対がなく、運命の一撃の絶え間ない期待というものもなく、バイロン主義的なところもほとんどない。運命の感覚はここでは驚異的な竜巻の感覚になり、呪われてはいない、気高いミーチャの感覚となっているのである。「なぜなら、もし深淵に頭からまっさかさまに飛び込んだとしたら、俺にはそれが満足なのだし、自分にとってはそれが美と感じるのだから。」

トロイカのイメージはもう一度ドストエフスキーの長篇の中に現れる一検事の会話の中で、嫌疑の特徴として、有名なゴゴリの姿で利用されている（上述したミーチャの場面の疾走のスタイルでゴゴリをほのめかしているのはドストエフスキー自身である）。破滅的なトロイカの抑揚のない、押さえつけられないような疾走は、検事の言葉を借りて言うならば、全ての道徳的な禁止を打ち破り、2つの深淵の両者に同時に不気味な満足を見つけるという点でロシアの特質のダークな面を表現している。勿論、ドストエフスキーはロシアの特性に全く別のものを見ていた。しかしながら深淵に関するそうやって表現されている思索は、1873年の作家の日記における「カラマーゾフの兄弟」の記述のずっと前からあったものだった。

民衆の生活の最も興味深い事実の一つを観察しながら、ドストエフスキーはロシアの特性の点について書いているが、それはこのような事実として登場する。「これは淵を乗り越えようとする欲求であり、半身ほど身を乗り出し、深淵を覗き見、ある時には、というよりもまれではなく一分別を失ったようにまっさかさまにそこに身を投げる断崖絶壁まで達している、途切れ途切れの感覚の欲求なのである。この欲求は人間に対する否定の欲求であり、時としてはそれ自体を否定しないで高揚する。最も主要な自分の心の宝物全ての否定なのである…。別の最も善良な人間は突然嫌でたまらないような悪辣者で犯罪者となるのである—この嵐の中では転落だけが存在し、激しい瞬間的な自己否定と自己崩壊の、我々にとって破滅的な循環は、他の人生での破滅的瞬間においてもロシアの民衆の特質に固有のものである。」ドストエフスキーの最終的な出口は以下のようなものである。「思うに、ロシアの民衆の最も主要な、最も根本的精神的欲求は一極度の現在の苦痛の欲求にあるのであり、それはどこでもすべてにおいてそうなのである。」

間違いなく、苦しんでいるロシアの人間に関する思索は「カラマーゾフの兄弟」の中でより高度な芸術的表現を、まさしくドミートリー・カラマーゾフの姿の中で受けるのである。ロシアの魂の深淵に関する発達と思索がドミートリーの中に見受けられる。我々の観点ではドストエフスキーの苦しむ登場人物と、それと精神的に親しい関係にあるアポロン・グリゴリエフの比較は、ドストエフスキーの引用されたテーゼの完全な内容を理解させるのである。

アポロン・グリゴリエフとミーチャ・カラマーゾフの性質の民衆性は、自身の出来事の根幹の直接的な進行に立脚している、失われた世界観の全体の中にはもうない。そのような世界認識をもった人格においては、最初の否定的感情の発生は人生の大部分の出来事との関係においては病的過程であり、そうではないということはないのである。普通人生の相対する反省の緊張を伴う最初の試みは因習的な理想を壊すような力はないが、しかしそれにも関わらず人間の足元の根幹を揺るがすのである。意識の中に蓄積して

いる存在の否定的側面は支配的にしかるべき存在の全体的な自然に要求するような力となるのである。一連の出来事と、知覚されている事情の中であって、人は決然として人生の条件を踏み越える事ができるのであるが、しかし信仰も否定も最終的な優越を勝ち取る事は出来ない。言っておかなければならないのは、存在の否定というものが意識的な（グリゴリエフに起った出来事のように）形でも、無意識的な形でも（ミーチャの場合のように）現れるということである。最終的には、一般に、あるいは時として一番目に、鬱積した否定が、個人的な、しばしば破壊的な情熱の、極度の現象（あるいは犯罪）の中に出口を見つけるのである。

我々が十分に語ってきたように、ミーチャとグリゴリエフは信仰の人であり、その信仰とは、自然発生の民衆の起源の信仰である。グリゴリエフの信仰はしばしば民衆の信仰のようであり、信仰はその土台としてある種の明るい子供時代のような作用を持っていた。（ちょうど、子供時代の作用の相当の役割に関する思索が、ドストエフスキーのお気に入りの思索に属しているようにである。）しかしながらそれと同時にまったく他の、完全に否定的な自己の作用も存在した。これらの最終的作用よりもより大きいものがミーチャにはあった。そして、グリゴリエフと、それにもましてミーチャ・カラマゾフは、すでにがたがたになっている道徳の環境から抜け出したのであった。

ドストエフスキーの主人公のほとんど全ては一伝統と伝説を失っている人々である。この光は光をもたらさないのである。信仰は、彼らのもとでは人生の思索の義務的な欲求として生じる。この欲求を、伝統から解放されることと同時に自然によって正当化して、ドストエフスキーは、時代の最も大きい特徴点と見なしている。しかしながらちょうどミーチャやグリゴリエフのようにそれでもやはりドストエフスキーによって《大地との人間の結合》と決定付けられているある種の道徳的伝統に関する表現は存在している。この理想的な状態はミーチャにとっては失われた精神の完全性の状態である。しかしこの理想は、ほとんど完全な内容を失っているが、それにも関わらず、全ての魅惑を備えており、信仰の源泉となりつづけているのである。《どうやったら俺が、大地と永遠に結びついていられるだろうか?》—ミーチャは質問している。（グリゴリエフも同様に、一度声をもらしている。『我々は大地を耕す事は出来ない。』）そして、当然のことながら、自分の力ではそれに答えをあたえる事が出来ないのである。人生の実際的な作用によって押しのけられた理想は力を保ってはいるが、しかし行為を支配する事は出来ない。もう一度、ミーチャの熱い魂の告白を聞いてみよう。『俺はこうして歩みつづけながら、いったい自分が悪臭と恥辱の中に落ち込んだのか、光と喜びの世界に入ったのかわからない。そこが困るんだな、なにしろこの世のすべては謎だよ！…美ってやつは怖い、恐ろしいものだ！はっきり定義づけられないから、恐ろしいのだし、定義できないというのも、神さまが謎ばかり出したからだよ。』これらの言葉は、ミーチャと長篇すべてを理解するために最も重要であるし、アポロン・グリゴリエフの様々な発言とも一致を見つけるのである。グリゴリエフが「人生とは恐ろしくて秘密のことなのだ。そこには皮肉的な始まりがあるのだ」と書いていたり、「美の秘密の天上的意味」について書いている事などは偶然ではない。そして彼自身も人生の総決算をしている。「勿論、思考の泥沼を得て、それを究明し、自分の中で育った理想を得て、理想の中で秩序だったものが、理想の中で用意された中でドクムギと同時に小麦を刈り払ってしまうのである。しかし人生は自分の重要な授業なのである。我々の魂は恐ろしい疑問によって我々の否定の誠実さやその正当性を決まり悪がり、再び小麦を守ろうとして、小麦を手にとるのである。」

グリゴリーエフにとっては、ミーチャと同じく、美は理想と同義語であり、というのまさしく美は理想の社会的道徳的内容が定義づけられないときには最初の計画として出演するからである。まさしく美とは、ドストエフスキーが我々に説明するように、精神的な生活の全体であり、正当化であり、このような生活との配合の中で、一時的であるにも関わらず、完全な理想を作り出し、その理想に沿って、人生は「美学の観点からではなく、道徳的な観点から価値づけられるのである」。しかしながらどうやら内面的な戦いはここでは終わる事はなく、ただ始まるのみである。理想としての美は、その民衆的伝統とは結びついていない。その伝統をぼんやりとはあるが、民衆達は知覚している。ところでそこから彼らの鋭い自己の不満足である「心の痛み」が生じるのである。ミーチャとグリゴリーエフではそのような不満足は彼らの理想を浪費しなかった。ところで一方ではただ理想の「謎」に関してや、「理想に一致する虚弱の知覚」に関してのみ話が及んでいる。これらの知覚によってグリゴリーエフの詩は満たされている。初期の「祈り」という作品で彼は以下のように述べている。「善と悪とを両方私に分け与えてください」。しかしながら最終的な詩作の一つでは、彼の周辺を果てしない暗闇と書いている。美の謎というものはどうやら、理想のように、悪になる権利をもっていないが、しかしそれと反対に悪に入ってはいけないのだが、悪にくいこんでいるのである。ミーチャ・カラマーゾフはその秘密を感じていたが、しかし美や聖や恐怖に答える事が出来なかった。理想は理想のままであるが、しかし欺瞞的なものなのである。

理想の欺瞞性は、グリゴリーエフやミーチャのように生活との比較の中で耐え切れない自己の抽象性の結果であり、より高い、このうえない絶望（あるいは否定）をもたらす。それらは、ドストエフスキーによると価値の再評価をもたらす全体的民衆の自然によって特徴付けられるのである。これらの激情は理想を特徴付けるものではなく、人間の中に悲劇的分裂の知覚を作り出すのである。ここのあたりで人間の前に有名な2つの深淵が現れる。人は完全に2つの相反する思想のままであり、この半分のおかげで、人生のどの時間においても、全体の知覚を保つ事ができるというのがその本質である。しかし、意識はそれにも関わらず最後まで他者の存在に関する一つの知覚を忘れる事が出来ない。分裂は不可避免的に己の心の痛みに飛び移るのである。鋭い道徳的な苦しみであり、闇に従い、深淵の後に続くのである。

我々がすでに知っているように、いくらかの痛みはグリゴリーエフの人生と切り離す事が出来ない。これは彼自身が「疑りぶかいすべての心における苦しみ」と名付けた苦しみであり、彼の知恵の苦しみと対立している（心の苦しみは丁度ドミートリー・カラマーゾフの心の状態であり、知恵の苦しみはイワンである）。この苦しみの主な源泉であるのが分裂に関する思考であり、その束縛から解放されるための突撃である。「ピョートルが雄鶏の鳴き声で泣き始めたように、イウダは柳の木で首を吊ったのだ。」グリゴリーエフは書いている。巨大な証明を行なうのであり、それは人間の心が分裂的な状態に移行しないようにするためであり、そのような地獄の矛盾の中で、矛盾は酒びたしになるか、あるいは教区の長司祭と地区の警察署長とのプレフェランス（トランプの一種）によって掻き消されるのである。特に移り変わらないのは、グリゴリーエフの思索によればロシア人にとっての状態である。「我々はどこか頭の悪い民衆であり、どこか荒々しい原始的な民衆である。我々の人生はどこか人生と分離されているのである。」この最終的な思想は、ロシアの性質に関する他の批評と同じく、ドストエフスキーが話した評論と同じ性質なのである。

しかしながらそれと同時にこの人生の嵐の中で生まれた苦しみは、人にとって唯一の正当化であり、あ

る意味では贖いでもあり始めるのである。この意味で、人の同様な状態において苦しみは欲求となるのである。人は絶えずずっと、ずっと深淵に身を乗り出していくのである。自己の破滅に呼び寄せられながら、破局点へと動くのである。

モークロエへのミーチャの絶望的な疾走は、深淵の淵での、最も最終的な苦しみであり、部分的に存在していない人間を自分自身と和合させる「破滅への愛」である。まさしく、どうやら我々にはドストエフスキーの言葉を苦しみに関するロシアの魂の性質として理解する事が必要なのである。作家は、正確にこの特性を発見しており、その特性を形づくるときにその特質が特質的に人の心にとって移行的な状況である事だけは見逃していた。この特質で前世紀におけるロシアの平民達を知る事が出来るし、ほとんど変っていないロシアの平民達の生活をも知ることが出来るし、ロシアのインテリゲンチヤについてもそうである。グリゴリーエフの後に続いて、ロシアのボヘミアン達の長い列が続くのである。

ミーチャは、グリゴリーエフのように、ドストエフスキーにとって、性質としてのロシア人を代表するものであった。その性質の中に、ドストエフスキーは「肯定的で、かつ否定的な力の富」を見ているが、しかしそれを彼は愛していたし、それを深く信じてもいた。まさしく性格の特質的な点をドストエフスキーに、グリゴリーエフを「神聖な思索者」と呼ばせていたのである。神聖さの下にドストエフスキーは、常に確信と共に人生を設計し、多かれ少なかれ自分で全ての理論の出口を実験していた思索者を理解していたのであり、

同様に我々が思い出すのは、ドストエフスキーの追悼記事が、社会評論家に、つまりは自分の確信を実行しなかったことでグリゴリーエフを非難していた、これは、グリゴリーエフの完全性への妥協のない完全なる突撃の結果なのである。人生を詩歌でたたえながら、グリゴリーエフは同様には人生の真の理解を得ることが出来なかった。なぜなら人生の一瞬に対立していたからである。本当の人生はドストエフスキーによると、一それは絶え間ない人々との結びつきであり、それを失うと一「傲慢な人間」になるとプーシキンに関する会話の中で彼は述べている。「傲慢な人間」になるということは、作者にとっては、個人的な完全性を探しながらも、残りの事に関しては忘れていたという事である。ドストエフスキーは深く、そして明らかにロシアのロマン主義者の両面を見ていた。これらをドストエフスキーはアポロン・グリゴリーエフによって見て、知り、より遅くになってミーチャ・カラマーゾフによって作り出し、研究したのであった。この2つの面を、私たちは見なければならないだろう。おそらくはグリゴリーエフ自身がそれを見たのであり、どちらにせよ、息吹のように必要不可欠な唯一のものとは見なしていたけれども、決して自分を過大評価しなかった。ロシアの偉大な作家達は、彼にとっては人間の過渡期に存在する「恐ろしい力の魔法使い」であった。魔法使いの意味というものは、それによってあますところなく表現されたタイプというものが現象を理解し、克服するという事を許していたからである。しかしながら、彼が書いているように、魔法使いにとっての苦しみは、彼が中央から詩を自由にする事であり、彼が人間である以上、この苦しみが必然的に全ての魔法使いを待っているのである。アポロン・グリゴリーエフ自身にもこの苦しみは待っていたのである。神聖な思索者として、彼は一步踏み出す事に新しい転落を感じ、それを隠すことが出来なかったのである。彼は生きる矛盾であり、真実をもたらしはしなかったが、嘘をもたらすということもなく、自己を自覚していたが、しかしながら屈服する事はなく、最後の瞬間までそこに向かって突進していったのだった。我々はここでは正しい道を見つけることが出来ないが、しかしながら正しい

道を行く事から遠いのは多くの人々ではない。グリゴリエフは恐れることなく自分の道を歩き、グリゴリエフとドストエフスキーのおかげで我々はまだ踏み込まれていないその道を知るのである。

В.Г.Селитренникова,И.Г.Якушкин. АПОЛЛОН ГРИГОРИЕВ И МИТЯ
КАРАМАЗОВ //М-во высшего и среднего специального образования СССР.
Научные доклады высшей школы. Филологические науки1(49). Москва. Высшая
школа. 1969,1. С.13-24.